



かつぎ屋

試し読み

湯殿思案

むかしから 湯殿は知恵の 出ぬ所

「ふうう」

忠道は、あちあち、と言いながら熱い湯に肩まで浸かつて深い溜息を吐いた。

八丁堀の御組屋敷からほど近い湯屋だ。忙しい町方は比較的人の少ない朝の内に女湯に特別に入れて貰っている。

今日は珍しく女湯には人がいなかった。この辺りの湯屋では朝の内は働きに出る男たちで混み、昼前から昼過ぎ辺りに女湯が混む。それでも朝早く湯に来る女衆がない訳でもない。大抵は町方が入りに来る時分には、番台に座る親父が何とかしてくるのだが、運悪く女衆と一緒にすることもある。それでも女衆の方がじろりと一睨みくれながら出て行くなり、きやあ、と悲鳴を上げて上がっていくなら安心だが、たまに湯から上がらない肝の太いのも居て、そう言う連中にとつては忠道は良いからかい相手にされてしまい、忠道は大いに困惑させられることになる。

隣の男湯では、朝の早い棒手振りやお年寄りで賑わっているようだ。がやがやした声が湯屋の天井辺りから遠く響いてくる。そのくぐもったような音が、女湯を余計に静かに感じさせていた。忠道は、もう一つ満ち足りた溜息を吐くと足を延ばし、湯船の縁に頭を凭れ掛けた。そのまま薄暗い風呂場の天井近くに開けられた、明かり取りの格子から漏れてくる光をぼんやりと見つめる。

江戸の湯は猛烈に熱い。湧き上がったばかりの朝湯だから、更に熱い。それをぐつと我慢して入っていると、段々と湯に体が慣れて来るのだから不思議だ。師走の寒さに縮こまっていた体が解されていくにつれて、思考が纏まらなくなっていく。

今起こっている御用のこと。
もう直ぐ子供を産む妻のこと。

そして生まれてくる子供の名前、生まれた後の色々な祝い事のこと。
そして、子供が生まれるとあつて、喜び勇んでいる母のこと。

考えねばならないことが山積みであるにも関わらず、考える端から全てが散らばっていくのだ。

「うーん」

尤もらしく唸ってみるが、やはり駄目だった。腕を組んでみたり、妙に姿勢良く座ってみたりもしたが、どれもまともな思考が繋がっていない。

—— 蕎麦の味噌汁が飲みてエなア…。
やつと出たと思つたら、これだ。

新妻の蕎麦は、出産のために実家に帰っている所だ。父と母は、忠道が嫁を取つたのを機に豊島村に隠居した。ここ一月ばかりは下働きの爺様と、小者との男三人暮らしだ。以前父母が居た頃は、父の小者を勤めて居た男の女房が下働き全般を請け負っていたが、父母について彼らも豊島村へ行っている。そのため、力仕事や蕎麦の手伝いに爺様を雇い入れたのだ。飯はその爺様がある程度やってくれるが、目が悪いせいもあつて味のしない味噌汁か、強烈に塩辛い味噌汁のどちらかしか出てこない。しかも、具は判で押ししたようにさいの目に切つた豆腐と葱だ。

—— 蕎麦の味噌汁が飲みてエ…。

蕎麦の味噌汁は、出汁も味噌も丁度良く味付けされて、更に出てくる毎に具が違ったものだ。忠道のお気に入りは何と言つても揚げと千切り大根の味噌汁と根菜類をたくさん入れた味噌汁だ。思い返せば思い返すほど、蕎麦の味が恋しくて堪らなかった。

「蕎麦も大変だろうに…」

蕎麦はこれから子供を生まなくてはならないのだ。忠道の味噌汁を作っている場合ではないだろう。

この当時、武家の嫁の初産は実家へ帰つて産むのが当たり前だった。二子以降は婚家で産むのが圧倒的であつたが、中には二子以降も実家で産む嫁もいたらしい。

蕎麦はそんな「当たり前」を軽く一蹴して、当初は堀井家で産むつもりで準備していた。が、夏の盛りに少し体調を崩した。十日ばかりも寝付いてしまったため、その時は忠道も心配の余りが気ではなかった。

そんなこともあり、姑のいない気楽な婚家だとは言え、実家との勝手の違いもあつて落ち着かないだろうからと蕎麦を説き伏せて、忠道は実家に帰したのだった。その際に、家のことは大丈夫だから心配するなど胸を張つたが、「大丈夫と言われては蕎麦の立つ瀬がありません」と拗ねられてしまい、機嫌を直してもらうまで大層骨が折れた。

勿論、大丈夫だと胸を張つた家の中は、ちつとも大丈夫ではない。下働きの爺様が頑張つてはくれているものの、何となく薄汚れたむさい家になってきているような感は否めなかった。

——ずっと鳶が帰ってこない訳でもあるめえし。
忠道は、頭を振りながら諦めて上がることにした。

「旦那ッ！てえへんだ！」

慌しく組屋敷の庭に走りこんできたのは、手下の孝助だ。

ちょうど出入りの髪結いに縁側で髭を当たって貰い、髭を結び直して貰っていたところだ。

「おう、孝助どうしたイ。一体エ何処から走って来やがった」

孝助は息を整えようと、荒い息を吐いている。相当遠くから走ってきたのだろう。白い息がもわつもわつと慌しく吐かれる。

「で…、出やがった！おかめひよつとこだ！」

「なにっ！」

思わず立ち上がりかけた忠道を、髪結いが髪を掴んで無言で座らせた。

「今度は何処だ」

いてて、と引つ張られた頭を押さえながら、孝助に聞く。

「へえッ！高崎屋ってエ、駒込追分の酒屋でさア」

「駒込追分だア？また随分遠くまで出張りやがったじゃアねエカ」

駒込追分は、湯島聖堂から北西へ進み、中仙道と岩槻街道（日光御成道）に分かれる辺りだ。この追分辺りに日本橋からの一里塚が立つており、高崎屋はその直ぐ傍にある大店中の大店だ。高崎屋と言えば、酒の他にも味噌、醤油を商う店で、樽がずらりと並んで大名屋敷よりも広い敷地があるほどだと言われている。近頃は江戸市中のあちこちに分店、支店を構えて商売をしているそうだ。通常の掛値ではなく、買ったその場で清算を済ませる方法で、町人、武士と分け隔てなく商いをした人気の店でもある。

孝助は、少し落ち着いたのか、懐から手拭いを出して汗を拭っている。汗が冷えて寒くなってきたのだろう。

「おおい、父ッつアン！元三の父ッつアン！」

忠道は、奥へ大きな声で呼ばわると、下働きをしている爺様が裏手から庭伝いに回ってきた。

「旦那、御用ですかね」

「この兄イに茶をやつつくンねエ」

忠道が言いつけると、へえ、と応えて元三爺様が下がると直ぐに茶を運んできた。忠道の分もある所を見ると、孝助の声を聞きつけて用意しておいたものらしい。

「有り難エ」

孝助は立ったまま茶に手を伸ばすと、ふうふう、といい加減に吹くいてぐい、と一口呷ったかと思つと、身体がビク、と震えた。

「あ、あ…、熱いですよ。氣いつけねエよ」

「爺っちゃっソ、遅えよ！」

ぶあ、と耐え兼ねて茶を噴出した孝助は、元三爺に悪態を吐きながら井戸端にすつ飛んで行き、井戸桶に水を汲んで持ち上げると、直に口を付けて水をがぶ飲みした。

そんなやり取りの様子を見ながら、忠道は考え込んだ。髪結いはそろそろ髭を結び終わるようだ。元結で髭を纏めてぐつと締め付けられる感覚がする。

——酒問屋か。これまでは献残屋、武具屋、廻船問屋、紅屋、呉服屋。何処も大店ばかりだ。

「旦那、終りましたよ」

無口な髪結いが、肩の上に掛けていた手拭いを払って声を掛けた。

「ああ、有難うヨ」

半分以上の空の忠道に挨拶をして髪結いが去っていく。恐らく八丁堀界隈の組屋敷などは、何か事件が起これば髪結いどころではなくなってしまうのは何処も変わらないだろう。長年出入りをしている髪結いは、心得て玄関に向かった。

「よし、孝助行けぞ」

一つ膝を打つと、忠道は立ち上がった。孝助は、合点、と言つと玄関先へ回っていった。江戸ではここ三月ほど、変な物盗りが出沒していた。「おかめひよつと」と孝助が言っていたように、おかめとひよつとこの面を被った二人組の盗人で、主に蔵があるような大店ばかりを狙う。この二人組は、家人や住み込みで働いている店の者達が寝ている夜の内忍び込み、知らない間に仕事を終えて去っていく。ひどい店では、金を取られたことに気が付かず、何日も経ってから帳簿を合わせてみて判つたと言つ所もあるくらいだ。

そんなことが起こるのも、この二人組は店にある金を全部持っていく訳ではないからだ。店の規模にも拠るが、概ね半分程度から千両箱二つまでしか盗まないのだ。以前被害に遭った大店の呉服屋では、たまたまその時期に仕入れの準備や掛取りなどで千両箱が十以上は蔵に積んであったそうだが、その内二つだけが盗られていたと言つ。

またこの二人組は金以外の物には目もくれない。蔵に仕舞つてあるどんな高価な物でも、一品たりとも盗らず、金だけを取って行くのだった。金を探すのに引つ繰り返した痕跡も無いと言つ。

いちばんとりにで

日差しは穏やかだが風が強い、空つ風に吹かれて江戸はかさかさ乾いている。こういう日は暮れどきからどこからともなく半鐘の響きが聞こえてくる、院は薬湯を手にしたまま耳をすますようにして動いていない。

「お寒いですか」

「いいえ」

要らないと言われて火鉢は下げたが、この半月を床で過ごしたのだ、肌は馴染むまい。

日鷹の主である楽清院は、仙台藩上士の娘で、伊達家の姫のご養育係だった方だ。とはいえ、先代にも、現藩主の慶邦よしくなにも娘はいない、正室、側室がご懐妊となっただけですわと各家臣で争われた大役で、なればなれたで鼻が高くなれたものらしい、まあ、ともかく落ち着いたのは正室、綱姫の元だった。姫にすすめられ、鷹司の某の妻となるが、死別、若くして髪を落とした。

とはいえ、某殿との間に子も成していた。仙台藩は陸奥六二万石の大藩、ゆかりの姫はごろごろいて、食うに困ることはなかったらしい、そもそも実家が実家だ。藩邸も近いここ品川にぽんと庵をたてた。日鷹の前に居たばあさんとで大名の娘を相手に行儀見習い指南とやらで暮らしていたらしいがばあさんが死に、日鷹が来ることになった、四年前だ。髪は黒々としていて、声も所作も若い、四十を五つも過ぎたというのに娘のように見える主におどろいた。

「日鷹」

「は」

二十歳と言われても頷けるだろう。

「黒田さまの…桐次郎さまのお子は見付かったのですか」

「……」

日鷹には、よくわからない。

黒田桐次郎のことは知っている、黒田家は里とゆかりがある、とくに角太郎、桐次郎の親子はとんでもなく。しかし、この院と黒田は関わりがないように思える。同じ藩ではあるが、他に何らかの因縁でもあるのだろうか。

「また黙りですか」

「黒田さまのことは存じ上げませんので」

彼はいまも仙台藩家臣宅に預けられている。

「ですが、日鷹はお庭なのでしょうか？」

「違います」

と、やつと主は薬湯を飲み干してくれた。日鷹が丁寧に煎じたもので、濃いのがみやすいはずだ。病み上がりで食べられなくとも滋養のいくらかは取れる。「日鷹は忍びの技を持ちますが、院さまに薬湯を差し出すくらいのもんです」

相手はくすりと笑う。楽清院さまはさびしいような笑い方をすると日鷹は思う。が、まあ笑わないよりもまだ、笑わない者は何を思うかを知れるように探らねばならない。

「白湯をお持ちしますか」

「いいえ」

こじらせた風邪を食事と薬湯で根気よく癒やした。早い内に治せなかったのが悔やまれるが、薬餌に関しては医者いらずであることを自慢にしている。このままの顔色なら夜も粥にしなくてもいいかもしれない。

「わたしは年老いて見られないでしょう？」

「はい」

『異能』と言われたわ」

「は？」

盆を下げて肩に掛けていた羽織を着せる、と、主はあらためて外を向く。縁の向こう、小体だが庭がある、あるものは枯れ、あるものは花をつける。

「あれは」

風鈴を釣る鉤がちょうどよいので大根を吊している。去年までは干し柿だった。

「大根です」

柿は鳥にやられる、大根にしたところで鳥のあれがあれなので良い頃に味を見られて持って行かれるだろうが、ましではないかとは思っている。

ぽつりと、しづ江というの、と聞こえた。

『しづえさんですか』

「しづえさ……？」

その呪いは知らない。

「わたしは年若に見られるのです。父も母も次第に気味悪がりました、童女が和歌集やら論語を誦んでいるのです、おもしろがるのははじめのうちだけで、清国やら異学など難しいことを言えば……やがて疎んじるようになります」

日鷹とは住む世界は異なるが、それでも言わんとすることはわかる。里ではおなごもおとこもあるようで区別はないが、里から出ると差が浮き上がる。おなごは財布の紐を握ること、おとこを尻の下にしくことは出来るが、政をしないし、学問も許されない。上に行くほどにそれは息苦しくらいになる。

院はその上の一段高いところにいたから、苦労も多かっただろう。日鷹はこくりと頷いた。

「黒田さまは、会いに来られたのです」

「……」

「これから長崎へ遊学されるというのに、噂を確かめにいらしたのです」
なんて方だ。

「姫の御側になり、噂もぼつと広がったのでしよう。まみえてもわたしのが年上というのに、ずっと子どもに見えたものです。これくらい対面の室で、外は細かい雨が降っていた。黒田さまの肩も袴も濡れて濡れていたのを覚えています。変わったばかりのお声でしづえさんですか、と問いました」

「お会いになったのですか」

「断る理由もなかったのです」

日鷹がここへ来るとき、三輪も長も誰も言わなかった、彼らは知っていたのだろうか。

* お願いとおことわり *

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: [@nedocoya4pr](https://twitter.com/nedocoya4pr)